

手話という豊かな言語_相良啓子さんへのお手紙_

ゆきゼミ M1_医療福祉ライター_今村美都

私と手話通訳との初めての出会いは、「星つむぎの村」という移動式のプラネタリウムを使って病院や施設でプラネタリウムを開催するといった活動を行う団体のイベントでした。「手話という言語にはこんな豊かさがあるのか」と、感嘆を覚えるほど。

にも関わらず、ろう学校の教師である友人は「手話という言語には表現に限りがある」というのです。何人かの素晴らしい手話通訳者との出会いの後に聞いた言葉ただけに、しっくりこないものを抱いていました。今日相良さんのお話を伺っていて、日本における手話教育のシステム上の課題もあるのではと思い至りました。

日本と欧米の違いとして、大学における手話通訳の養成課程の有無のお話も出ていましたが、そうしたことも手話という言語の豊かさが一般に十分には認識されていないことはもとより、学術的な場などで手話通訳ができる人材が育たないことにつながり、手話通訳がビジネスとして成立しているとは言い難い状況を生んでいると感じます。

また、国際手話の話からは、「手で表現をするのだから国を超えて会話ができるというメリットがあるのでは」と、ある時私が前述のろう学校の教師で本人も手話を話す友人に対して訊ねた時、「言語がその国の文化を背負うように、手話も文化を背負うし、時代も背負う。たとえば電話だって黒電話の時代とスマホの時代では表現が変わる。同様に、その国にしかない表現が生まれ、手話は全く異なるものになる」という返事が返ってきたことを思い出し、改めて国際手話の必要性を認識した次第です。

19歳で聴覚を失った後、旅行会社での奮闘、現在に至る相良さんの人生に、大いなる共感と尊敬を。

友人になりたいかどうかは、耳が聴こえるか聴こえないかではなく、その人が魅力的であるかにあるのだと再確認した講義でした。

素敵な講義をありがとうございました。